Person of the Month

誰もが、様々な場所で経験した3.11。毎回色々な「この人！」をクローズアップし、3.11後の生き方をご紹介します。

皆さんは日常「色」を意識していますか？　色は我々に大きな影響を与えますが、欧米では医学的な見地からの研究も進み、病院やカウンセリング現場で応用されています。今回はそんな「色」の専門家である、カラー心理士の島田敦子（しまだのぶこ）さんにお話を伺いました。

「先ずテレビを消しなさい！」

多彩な仕事の一つとして、カラーセラピストの養成を行っている島田さん。巣立っていった生徒さんや、自らが行うセラピーのお客様が国内外に大勢いるそうです。「3・11直後、そうした人達から一斉にヘルプコールが来ました。自分はどうしたら良いのか。このままでは日本は壊滅するんじゃないのか。そういった内容が殆どです。国内にいる人達に私が伝えたのは、先ずテレビを消して、映像を遮断しなさいということでした。」

その一方、国外にいる人達からは、自ら積極的に情報を収集するよう努めたと言います。「政府や東京電力からの情報よりも、国外メディアの情報を重視しました。実際、後になって色々な発表が嘘だったことも分かりましたし、国内メディアがオンエアしない情報を国外メディアは流していました。日本では報道を規制していたと思います」。日本知人たちには「同じ日本人として映像から目を背けることはいけないこと」という意識が強かったそうですが、国内テレビから映し出される**壮絶な映像によってメンタル面にダメージを追い、倒れたりしないようにすること。正しい情報を入手すること。**島田さんはこの二点を呼びかけたのでした。

動き出した仲間たち

「海外の大学に留学している知人は震災直後、多くの友人たちから励ましの声をかけられ、あっという間に募金の輪が広がったそうです。知人は福島出身ではありませんが、**友人たちは彼女＝日本と見なし、日本に対して心を向けてくれたのです」。**

国内の仲間たちも動き出していました。下着を贈ろう、歌を贈ろうという継続的な呼びかけをはじめたのです。

そして特定非営利活動法人ジャパンセラピスト協会の理事長でもある島田さんと有志が集まり、チャリティイベントを開催するに至ります。二〇一二年の十月でした。「札幌へ自主避難されて来た方々と私たち道民、或いは避難されてきた方々どうしが友達になれる場を作ろうと思ったのです。必要以上に特別視しないことを大切にしました。同じ日本人であって、彼らが何か悪いことをしたわけでもない。本当に大変な思いをされていたので、私たちにできることをカタチにしようと思ったのです」。

100年後のための今後10年

そんな活動を通じて島田さんは、石巻出身の方と出逢います。同年十二月には石巻へ足を運び、その方がお寺の家系だったことから、仙台のミュージシャンに協力を乞い、お寺でのライブを仕掛けました。そうした行動の中で実際に目の当たりにした宮城・福島。特に「復興バブル」と言われた仙台の活況には、福島の方々も理不尽なものを感じていたそうです。

「自分は原発について良く知らなかったので、反原発の運動には抵抗がありました。そもそも実感がありませんでしたし、今もそれほど詳しいわけではありません。でも福島第一原発が事故を起こし、大量の放射性物質を放出したことは事実ですし、北海道にも泊原発があるということも事実。今後、私たちがどうやって未来を創っていくのか、東日本大震災と史上最大の事故をひき起した福島第一原発から何を学ぶかが大事だと考えています」。

今年、北海道神宮祭の行列に加わった島田さん。奇遇にも復興支援義援金の箱を持つことになり、多くの方々から温かい声をかけられたそうです。「怒りから生まれるものはNG。格好付けず自然体で、自分の行いに気をつけていけば良い仲間が集まります。仲間とともに楽しく行動していけば、その姿に子どもたちが共鳴し、学んでくれます。100年後の未来のために、今後10年で何ができるのか。私は私の立場で考えていきたいと思います」。

様々な行動のカタチがある中で、あくまでも自然体で取り組む島田さんは、おそらく今後もその歩みを止めることはないでしょう。

取材／Indy横山　撮影／小森学

FMラジオでお馴染みのDJタック・ハーシーさんが語る「音楽のチカラ」

Better Music for Better Days

「山の上に炎が見える。それなのに誰も逃げようとしない。」

生ギターに乗せてハスキーな声で歌うアシャの『ファイアー・オン・ザ・マウンテン』。目の前にある危機に対して、それに気付きながら、誰も何も行動を起こそうとしないことへの疑問を歌った曲だ。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

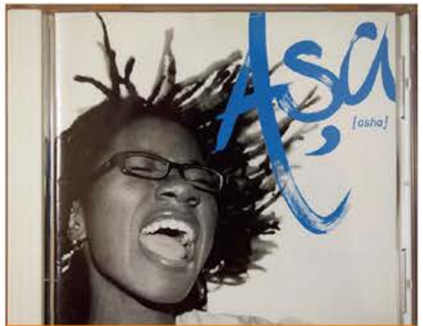
ナイジェリア人の両親のもとに生まれたアシャは、小さい頃から内戦や暴力、社会的な腐敗や混乱を経験しながら成長したという。その経験から得たものは、彼女の歌の中にしっかりと実を結んでいる。なぜ戦争や争いに大切な命を掛ける必要があるのか。心穏やかに生きる術はないのか。国を襲った困難や災害、社会的な問題から、なぜみんな目を逸らしたままなのか。そんな疑問を歌にして、決して声を荒げることなく歌う彼女の声が胸の深いところに響いてくる。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

メロディーに乗ったその言葉の一つ一つを聴いているうちに、彼女が歌う疑問は、母国ナイジェリアだけに向けられたものではないことに気付く。被災地復興のための予算が、復興とは直接関係のないところに使われ、仮設住宅に暮らす人たちがそのままにされてはいないか。まるで原発事故なんてなかったかのように、様々な社会的な枠組みが決められてはいないか。無益な争いへの歩みを始めてはいないか。そして、その現状に気付きながら見て見ぬ振りをしてはいないか。

「川が氾濫し逃げ場を失った時、私たちはようやく逃げ始める。あの山の上の火を消しておけばよかったと後悔しながら。」

曲の最後でそう歌うアシャの声には、なぜか絶望を感じない。その逆だ。希望を感じる。**まだ間に合う、今なら変えることができるという希望**だ。未来を担う子どもたちのために、今できることをやり、伝えることを伝えていこうという信念に裏打ちされた柔らかな歌声が、穏やかに背中を押してくれている。



“FIRE ON THE MOUNTAIN”
by ASA

㈱フーム空間計画工房 一級建築士事務所
hu:mu
〒064-0944 札幌市中央区円山西町 10 丁目 4-17
TEL. 011-613-5702　FAX. 011-613-5705
http://humu.jp
humu@humu.jp